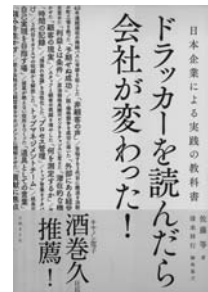




# 『ドラッカーを読んだら会社が変わった!』

佐藤等著

日経BP 1800円＋税



読む者にとってはと胸を衝く熱を持つ本である。

これまでも経営関係の書物が必要に迫られて手にとってきたのだが、最もそれらに足りないものが、この「熱」だった。

上手に調理された料理であっても、作り手の熱がこもったものと同じで、熱がある。

書物の最終的な価値は、熱があるかどうかではないかと思ってしまう。

本書の中心は、事例にある。どのようにドラッカーを自らの経営に役立てたかにある。一人ひとりがどう体を動かし、知恵を絞り、日常と格闘したかが訥々と描かれるなかに、改めてドラッカーの述べたところがなおいっそう切実な輪郭をともなっており、追ってくる気がする。

というよりも、おそらくこの知の巨人の実践精神が著者をしてかくも有効性の高い一連の行動に駆り立てたように見える。

いささか宗教臭い評言になるのだが、ドラッカーによる荒野の呼び声を真摯に聞き、その熱をまともに肌で受け止め、真摯に応えた仕事と言ってもよいかもしれない。

その証拠が——ふたたび冒頭に戻ってしまうのだが——本書

## ふぞろいな豊かさ

のいちばんの持ち味でもある、生き生きと血が通っている点である。生きた人間が生きたままに描かれている。

こうして実際に生きて働く経営者像を見てみると、緻密に描かれていくほどに、経営というもの

の本来的にはらむダイナミズムを実感させられる。それは学問である以上に、運動体であって、生命そのものである。

その放熱のありさまを文章で再構成するのは、ごく自然に見える。並たいてい以上の努力が要されるものである。少なくとも私の知るかぎりなかなかな成功するのが困難な種類の仕事であるのは確かと言えそうである。

すぐれた美術品と対話するよに、心を開いて一枚一枚でいねいに見て、鋭敏なところ、かけがえのないところ、卓越したところを探り当て、描ききって

いるように感じられる。「実践とはそのようなものなのだ」と言えばそれまでだが、一言で片付けるにはあまりにも深遠な示唆がそこにはある。

というの、つまるところ経営を描くということ、人を描くということと同義だからである。それは緻密で、親切で、優しい心の持ち主のみが描きうる世界でもある。あるいは、世の

片隅への思いと、傷つきやすいささやかな存在への配慮あるものだけに許される仕事でもある。本書の最終部には、「言葉はマネジメントそのもの」という一文が出てくる。まさにそのとおりで、つきつめて言えば、すべては言葉の働きである。人も組織も、言葉によって賦活され、発展を促されるもする一方で、言葉によって停滞と墮落を余儀なくされることもある、繊細な生き物ということだ。

この問題意識は、今後いっそう緻密に展開されていくべきであると考える。

最後になるが、登場する経営者たちの爽快なまでのふぞろいさがい。人も組織もすべてがほうつておいても多様であって、多様であるほどに豊かでカラフルである。

そこにつけ加えられるべき理屈は私たちがふだん考える以上に多くある必要はないのかもしれない。ふとそう思わせるものがあつた。

社会生態学研究者 森里陽一